

## 様相の形而上学における現実主義と必然主義

池知翔太郎 (Shotaro Ikeji)

東京大学

---

様相の形而上学にはよく似た二種類の対立が存在する。第一に現実主義と可能主義の対立があり、第二に必然主義と偶然主義の対立がある。簡単に言えば、現実主義は「あらゆるものは存在的かつ現実的である」と主張する立場であり、可能主義は現実主義を否定する立場である。また、必然主義は「あらゆるものは必然的に存在する」と主張する立場であり、偶然主義は必然主義を否定する立場である。

以上の二種類の対立はどちらも様相と存在という主題に関する対立であるが、第一の対立における現実主義という立場と第二の対立における必然主義という立場は、形而上学的にどのような関係にあるのかが明らかではない。Linsky and Zalta (1994)は、必然主義が現実主義の一形態であると主張する。この主張は以下の理由で疑わしい。現実主義がどのような立場であるのかが明確でなければ、必然主義が現実主義の一形態であるかどうかを決定することはできない。Linsky and Zalta は現実主義の内容に関して Adams (1974)と Plantinga (1976)に依拠している。だが、現実主義の内容の一部として「あらゆるものは現実的である」という主張を認めるかどうかについて、Adams と Plantinga には見解の相違がある。しかし、Linsky and Zalta は現実主義の内容に関する両者の見解の差異に十分な注意を払っていない。

この発表では、Adams と Plantinga による相異なる二つの現実主義理解から、現実的なものについて相異なる二つの定義が導かれるということを示す。その上で、必然主義が現実主義の一形態であるという主張が、現実的なものの定義に関する混乱に基づいていることを示す。

### 参考文献

Adams, R. M. (1974) 'Theories of Actuality', *Noûs*, 8: 211-231.

Linsky, B. and Zalta, E. (1994) 'In Defense of the Simplest Quantified Modal Logic', *Philosophical Perspectives*, 8: 431-458.

Plantinga, A. (1976) 'Actualism and Possible Worlds', *Theoria*, 42: 139-160.